

登山時報連載中

遭難現場からのレポート

遭難の教訓





遭難現場からの レポート

新連載

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

このヘリは富山県警ではない。私が岩場で足を痛めたパートナーを懸垂下降で取付きに降ろして、レスキューザックでヘリがピックアップできるところまで背負い搬送して、吊上げられている時に撮った写真。

遭難の教訓

☆この連載では、実際の山岳遭難事故をもとに、推測により教訓を引き出している。
疑問点などの問い合わせは全国連盟・遭難対策部へ寄せていただきたい。

備忘録①『生還』

大雪溪から白馬岳に登頂し頂上小屋で宿泊した二人は、早朝、小屋を出発し祖母谷温泉を目指した。70歳台の二人には、ほとんど下りとはいえ、コースタイムで約8時間、標高差2000mの清水尾根を下降するのは楽勝とは言えない。晴れていれば毛勝三山から剣立山の絶景を眺めながらの稜線歩きであるはずだが、濃霧となり、足元の登山道さえよくわからない。しばらく霧が晴れるのを待つものの、天候は回復せず、小屋の食事時間も気になりだし、地図と磁石で方向を確認して進むが、山腹を巻くことも多くハイマツ帯で完全に登山道から外れて

しまった。10時頃、携帯電話の通じるポイントがあったので、祖母谷温泉には「道に迷ったので遅れる」と連絡し一安心。ココヘリに加入していたので、「現在地さえ分かれば登山道に戻れる」と考えて連絡。だが、「搜索・救助要請ではなく、現在地確認のためのフライトはできない」と伝えられた。まだ、この時点では二人とも遭難という自覚はなく、深刻には考えていなかった。尾根上を下降し続けたが、16時頃、ツエルトでビバーク体制に入る。ここでも携帯電話が通じたので、所属会の山行管理者にビバークする旨をメールする。山行管理者はメールを確認したが「ベテランだから大丈夫だろう」と考えて特に対応しなかった。この時は

ココヘリには連絡せず、以降は携帯電話が使えなくなった。

翌日も登山道を探したが見つからず、体力温存のため13時にはビバークした。さて、祖母谷温泉では「道に迷って遅れる」と連絡を受けたものの、翌日も下山してこないで遭難と判断して富山県警へ通報。16時頃、県警ヘリコプターでルート上を搜索したが目視では見つからなかった。黒部警察署からは遭難者の居住地警察署へ連絡し、家族と連絡をとり、計画書を確認した。このとき家族はココヘリ加入を知っていたので、23時頃、ココヘリにも連絡し搜索を依頼した。ココヘリは直ぐに富山県警と連携し、搜索できる受信機を持っていた県警に遭難者のIDを連絡した。翌朝、強風がおさまった9時に受信機を持った県警ヘリコプターがフライトし、わずか20分で発見。二人は無事にヘリコプターでピックアップされ、生還した。

解説

70歳台の夫婦が、7月下旬に2泊3日の小屋泊まり山行で予備日1日。猿倉から大雪溪を登り白馬岳登頂。頂上小屋で一泊し、清水尾根を下降して祖母谷温泉で二泊目。最終日は樺平駅から黒部峡谷鉄道で帰るという、年齢を問わず健脚向きと言える計画だった。無駄に体力を消耗せず、二日間のビバークに耐えたこと、緊急連絡先の家族と連絡がとれたことなど、組織登山者としての基本的な登山技術は身につけていた。

反省すべき点は、「何とかなる」という正常性バイアスに基づいて、登山道が不明瞭の中で磁石を利用して先に進んだことだ。国内を代表する大渓谷への下りであることを考えると、登山道を外れて降ることは危険すぎる。また、命綱ともいえる携帯電話が使えなくなったことも

問題だ。

早期の救出には「ココヘリ」の存在を抜きには語れない。緊急連絡先の家族が「ココヘリ」について理解していたことが最重要ポイントだった。

ココヘリでは、コールセンターで搜索要請を受電した際、ご本人からの通報であった場合は、状況に応じ110番通報をアドバイスしている。その後、ココヘリ搜索対応の担当者が直接連絡して状況を把握し、状況に合わせたアドバイスも行っている。そもそも緊急コールセンターに「現在地を教えて欲しい」というのはココヘリの基本を理解していない。

ココヘリの位置特定方法は現地までヘリを飛ばして上空から受信機にて電波を捉えて位置を特定するもので、GPS等でオフィスにいて現在位置を把握しているものではない。※現会員証は、ココヘリ搜索用電波とBluetooth電波を発信している。このBluetooth電波と携帯電話を使って位置情報を取得することも可能。(但し、携帯電話の通信圏内に限る)

ココヘリの利用方法

☆今までも、遭難者自身が警察や消防には連絡せず、ココヘリだけに連絡する事例があった。「警察や消防に連絡すると大きく報道される」などの心理が働くためと考えられるが、ココヘリが出動するときは、必ず警察と連携する。遭難者自身(同行者を含む)が連絡できるならば、ココヘリの緊急コールセンターより先に110番通報する。そして「山岳遭難であること、氏名、場所、状況、ココヘリ会員、他に聞かれたこと」を伝えた後に、ココヘリにも連絡し警察へ連絡済みであることを伝える。

☆最近の事例では留守宅の家族から以下の問い合わせが発生している。

—携帯電話が通じない。—LINEやメールが来ない。—無事に山行しているか確認して欲しい、などなど。

下山予定日時を過ぎていない場合の安否確認はココヘリのサービスではない。家族や帰りを待つ人には必ず「①所属団体の山行管理者（団体会員の場合）、②警察（110番）、③ココヘリ」という順番に連絡・相談することを徹底していただきたい。

備忘録②『失踪』

ある月曜日の10時、労山事務所での勤務開始と同時に電話が鳴った。だいたい休み明けの朝一番の電話は良い話ではないことが多い。「ちょっとお尋ねしたいんですが、よろしいですか。うちの社員が出社しないんですが、たぶん山から帰ってないのだと思います。どうしたらいいのでしょうか？」案の定だ。「警察には届けたのですか？まだだったら家族の方と連絡をとって搜索願を出した方がいいですよ」と私はアドバイスした。だいたい年に1～2回ぐらい

会員外の方から、こういった相談がある。世間ではまだ「山登り」に対して道楽や物見遊山ではないかという感覚があり、警察や消防など「犯罪捜査」や「防災消火」を仕事として行っている公務員に「搜索してもらおう」ということに対してためらいがある。

翌日、同じ人から電話があり「警察から連絡があり、地元民間救助隊組織に搜索を依頼したが見つからない」とのこと。ここで初めて詳しく状況を聞くと、東京の労山会員Sさんだった。長野県にある御座山（2112m）へ単独で一泊二日の計画。初日は麓の民宿に泊まり、翌日は山頂を経て下山し帰宅するはずだった。同宿の登山者とタクシーで登山口まで行って別れたのが最後の目撃情報である。下山予定日の翌日夜、家族がSさんの携帯電話に電話すると着信はしたが、二日後の朝には不通になった。慌ただしく所属の山の会に連絡を取り、山行計画書を取り寄せる。東京都勤労者山岳連盟救助隊の招集をかけ、私（救助隊副隊長）以下4名が出動し深夜に佐久警察署へ。搜索に入る旨を連絡して仮眠し翌早朝、小海町交番で打ち合わせ

後、予定の登山ルートを進むが手がかりなし。それから10日間にわたり、延べ130名が搜索したが、全く手がかりが見つからなかった。

7年後、Sさんの所属していた山の会の代表から全国連盟事務局に電話があった。「Sさんの失踪宣告がありました。労山基金の申請はできませんか？」とのことだったが、残念ながら労山基金の交付申請は事故発生日から1年以内である。特別な事情としての引継ぎも残っていな



初夏に発生した遭難だったが、労山基金が限度額一杯となり、搜索費用が自己負担となった秋以降も、あきらめきれず一部有志（都連盟救助隊）で搜索を続けた御座山を天狗山から撮影。

かった。

あらためてこの間、家族や関係者が精神的にも経済的にも苦慮してきたことだろうと感じることになった。

解説

6月後半、御座山ではシャクナゲが咲き誇る時期となる。最後の目撃者となった方（労山会員外）の報告によると、この日は天候に恵まれ登山日和だった。コースには所々岩場もあり、花に見とれて滑落すれば助からない場所も少なくない。

N T T ドコモの情報では、最後に受信した基地局は西側の佐久方面だった。東側は群馬県境を経て御巢鷹山（国内最悪の航空機事故現場）など西上州の山々が連なり、東側では携帯の電波が届かない。このため、携帯電話が着信していたことから、西側を重点的に沢沿いも含めて搜索した。しかし、残念ながら痕跡も見つけることができなかった。

山で死んではならないとは言うまでもないことだが、「山で行方不明になることは絶対に避けなければならない」という文言も付け加えた。家族友人はいつまで経っても行方不明者生存の望みを捨てきれず、社会的にも困苦を味わうことになる。

下山遅れに対して、留守家族の対応は様々だが、登山経験のない場合は一日二日帰って来なくても、心配するだけで、どのように対応したら良いのかわからない場合もある。別件であるが、過去に高校山岳部員だった知人の父親から「息子が南アルプスに行ったきり、下山予定日を三日過ぎても帰って来ない。どうしたら良いか？」という問い合わせがあった。すぐに110番通報して搜索願を出すように伝えたと、その日のうちに赤石岳の尾根でケガをして動けな

くなっている知人が発見され、無事に救助された。

今回はSさんの勤務先上司が山岳遭難を心配し、その会社の取引先でもあった労山に電話で問い合わせてきた。本来であれば、山岳団体に所属しているならば所属団体で山行を管理し、下山連絡を受けるべきだが、こうした基本的な体制が取れていない会・クラブもある。初動搜索が遅れることは生死に直結する。この遭難事案が発生した当時、個人会員制度を準備しており、個人会員に対しては全国連盟が山行管理することになっていた。下山連絡を全国連盟で受け、下山連絡がない場合は本人と家族（緊急連絡先）に連絡の上、連絡がつかなければ、状況に応じて搜索・救助体制をとる。これはコンパス登山届システムの「下山通知」と同じような機能だといえる。

コンパスの利用について

コンパスへの登山計画書の提出について「所属団体に提出した上で二重に届け出るのは手間が増える」という声がある。もともと、登山計画書は所属団体だけでなく、登山する地域を管轄する警察や自治体にも提出する必要がある。これは遭難事故発生時に効率よく搜索・救助活動を行うためであり、条例となっている地域もある。しかし、地域ごとに提出先や方法がバラバラで、登山者にとっては不便であった。これを統一し、全国どの山域の登山計画書でも受け付けるのがコンパスである。

コンパスに計画を提出していれば、万が一の際にもマスコミから無届登山と批判されず、主要山岳地域の警察とは連携できているので、搜索・救助活動もスムーズに行われる。スマートフォンが使える人は是非、早急に利用を検討して欲しい。



遭難現場からの レポート

第二回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

県警の山岳救助隊は縋のジャージ

遭難の教訓

備忘録③ 『搬送』

月曜日の朝、番号登録のない地方から着信があると、たいてい良い知らせではない。その日の連絡は静岡県警島田署からであった。アマチュア無線家より山岳事故発生の110番通報があったという。「N山の会からの無線連絡があり、Aさんが200m滑落し頭部打撲で意識不明、川嶋の携帯電話に連絡して欲しい」という救助要請だった。静岡県警ではヘリコプターを手配し捜索に向かう予定だが、事故パーティとその後の連絡が取れず場所が特定できないので計画

書を送って欲しいという。そこで、会の担当者が南アルプス深南部・黒法師三山を7人パーティで縦走という概要の計画書を送ったところ、同行者1名がヘリのホイストでピックアップされたが、事故者と残りの5名は現場に残されたままだという。静岡県警からは「本日の救助活動は天候悪化のため断念し、明日早朝、地上と空から救助に向かう。現場は落石が多く危険なため警察のみで救助する」という連絡があった。

N山の会では先発隊を派遣し現地本部を設置して、情報収集と事故パーティおよび事故者の

家族受け入れをすると決定した。警察と電話で打ち合わせたところ「静岡県警山岳救助隊6名と島田署の若手警察官が入山し、天候も回復する見込みなのでヘリも飛べる。東京からの救助隊は必要ない。」とのことだった。しかし、①事故者の生死が確定していない。②現場に同行者が残っている。③ヘリが飛べない場合は多くの人力が必要となる。など、現場が危険で困難な引き揚げ作業になる可能性を考慮し、東京都勤労者山岳連盟救助隊に出動を要請した。責任者・臼井救助隊長、副責任者・川嶋副隊長、他、総勢9人の救助隊員が夜中に東京を出発し、現地本部とした寸又峡温泉ふじみや旅館に未明、到着した。事故パーティのうち2名は現場で幕営し3名は自力下山し現地本部で待機となっていた。

先発隊および事故パーティメンバーと合流し状況確認後、役割分担・行動予定を策定し、朝5時半に県警救助隊責任者と打合せを行い、「滑落したルンゼ内では落石の危険があり県警山岳

救助隊員6名の作業とするが、ヘリピックアップのための枝払いとロープでの引き上げを手伝って欲しい」との要請であった。

事故現場は、湯山林道をパトカーで移動し登山口から2時間程登り、白ガレの頭から10分程、前黒法師山へ下った地点であった。救助隊は、10時少し前に事故現場残留者2名と合流した。滑落地点へは県警救助隊員が下降して事故者を梱包し、ロープ4本を接続して約200m上部の尾根への引き上げを開始。電光型で2か所に滑車を利用したため結び目の通過に協力した。人数が多いのでゴボウでの引き上げとなりユマールが威力を発揮した。11時半に尾根への引き上げ終了。

ところが、昼食休憩中に南の谷からガスが湧き、急いでヘリを呼ぶが12時半には北側の大無間山と真上は晴れているが、南側は視界100m程になってしまう。その結果、ヘリの音は聞こえるものの上空に飛来できず、13時半、人力で登山道を搬送することとなり、14時に搬



搬送中、崩れるザイル担架

送開始した。ザイル担架を作成し、両脇各3名、前後に各1名がついて、持ち上げたり引きずったりしながら進む。途中で2mほどの木を両サイドに入れる。16時半、湯山林道に到着しパトカーで17時半前に寸又峡温泉に戻る。事故パーティーと家族は、検死と事情聴取のため警察署へ赴き、救助隊員は深夜から翌早朝にかけてそれぞれ帰宅した。

解説

本件は2001年10月22日に発生した事故の概要である。携帯電話が通じないエリアで、アマチュア無線が威力を発揮した。アマチュア無線で緊急通報したこと、無線愛好家がそれをキャッチしてくれたこと、緊急連絡先の電話番号を伝えることができたことなどが、早期の搬送活動に繋がった。残念ながら事故者は亡くなったが、事故発生の翌日には家族のもとに帰ることができた。

ヘリコプターによる救助が主流となってきたが、ピックアップできる場所までの移動と天候によっては人力での搬送となる。静岡県警は山

岳救助隊を組織し、高度な技術も備えていたが、人力での救助は多くの人員が必要となるので、東京から出動したことは正解だったと思う。N山の会は会員数も多く、家族・マスコミ対応、救助隊員移動の車と運転手の確保、現地本部要員の派遣など、それぞれの局面で行動できる会員がいたため、救助活動は遅滞なく行うことができた。遭難事故の対応には事故現場の救助隊員以外でも人員が必要となる。

装備に関してはヘリでのピックアップのみを想定し、スケッドストレッチャーを持参しなかったことが、人力での搬送を困難にした。ザイル担架を2回、作り直すことになった。未舗装の林道移動は普通乗用車では対応することができず、ハイラックスサーフも途中でパンクしてしまった。

余談ではあるが、私が電話連絡を受けた時は、当時勤務していた西武百貨店池袋店で展示会があり、根付愛好家の宮様が来店されるのでその警備を担当している最中であつた。そのため、仕事をしながら出動の連絡をして、翌日の休暇を取得した。この前年にも救助活動で休暇

を1日だけ取得したが、救助活動が2日間になってしまった上に、テレビや新聞でも報道された事故となったため、店の幹部の知るところとなり、配置換え（左遷）をされたばかりだった。今回はなんとしても救助活動を1日で終わらせたいと必死だったが、今思い返すと、危険を伴う救助活動中に余計なことを考えていたと、反省している。



両脇に木の棒を入れて補強する

遭難現場からの レポート

第三回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志
国際部長 大和田英子

遭難の教訓

備忘録④『墜落』

第1回アジアトラッドロッククライミングカップに参加

秋号の巻頭言にも書いたが、4年ぶりの海外クライミングとして訪れていたカザフスタンで、まさかの事故を起こしてしまった。壁に触れることなく5mほど落ちたので「滑落」「転落」というより「墜落」という感じだった。クライミングは15歳から始めたが、センスがないのか上達せず、特にスポーツクライミングのグレードは上がらなかった。その代わり、沢登りや脆い岩場では確実に登れるという自負があったが、今回は5c（フレンチグレード）という

易しい岩場で痛恨の事故になってしまった。

主催者であるカザフスタン山岳会のカズベク会長とは2004年10月に開催されたアジア山岳連盟光州（韓国）総会以来の付き合いで、揶揄われているのか？と思うぐらい私の顔を見るたびに「K2サミッター」と呼ぶ。彼は陽気で親しみやすく「クライミングフェスティバルをやろう」とその頃から意気投合していた。その後、2019年に「カザフスタンで開催するか来ないか？」と言われたときはアイガーなどを登る計画があったため辞退し、翌年からはコ



参加選手の記念撮影

コロナ禍で開催できずにいた。今回は4年ぶりの開催となり、日程的にも参加できるので、日本での開催も視野に入れて参加することにした。

この催しは、山岳関連競技として、カザフスタンスポーツ庁、アジア山岳連盟、国際山岳連盟共催の新しい試みである。オリンピックや各種国際大会とは異なり、スポンサーのつかない純粋な山岳競技として確立したいと考えている。

開催場所はアルマトイから25 kmほど南東に離れたアラタウ山脈の一角チューユクス溪谷。標高約2400 mにあるロッジで寝泊まりしながらの6日間の日程となっていた。アラタウ山脈はテンシャン山脈から派生した支脈でアルマトイの街を見下ろしている。最高峰は4000 m超え、部分的に氷河を抱いた美しい景観がどこまでも続いている。

8月26日、午前11時に開会式を行い、遭難犠牲者追悼公園で黙祷、献花したのち、標高約2700 mの競技ベースキャンプに集合し、ルールの詳細説明を受けた。その後、9本用意されたルートの取付まで20分ほど登り、実際のルートを視察。アプローチは足場が不安定で一般ハイカーには厳しい。

参加チームはカザフスタン3チーム、イラン4チーム、韓国2チーム、日本1チーム、合計10チーム。総合10チーム、男女ペアの混合がそのうち3チームという構成となった。一方、用意されたルートは9本だったため、26日夕刻にクジで登るルートを選択することとなり、日本は10番目、すなわち朝最初に取付く権利を得られず、好きなルートを選べるものの、先行チームがルートにいる間は待機となった。一本のルートは7ピッチ前後、与えられた時間は3時間、登りきれなければ懸垂下降しなければならない。

滑落事故発生

8月27日、午前中は快晴で湿度も低く絶好の登攀日和だった。朝10時前後に各ルートを登攀開始。開始直後からカザフスタンの運営担当が苦勞していた。その原因は、まず、言語である。参加者の中には英語が十分に理解できないメンバーもいた。私たちは競技開始から5時間以上待機して14時に岩場へ向けて出発。先行パーティが懸垂下降中で、取付でも30分程待たされた。15時にスタートの合図を無線機で連絡し登攀開始したが、制限時間と日没が重なり、また雨もパラつき出した。当初は大和田が最初のピッチをリードする予定であったが、時間短縮のためリード交代を提案した。ルートは前日の見立て通り、かなり脆い部分が散見され、難度は高くないものの十分な注意を要するルートであった。

最初のピッチ30 m 5 aは難なく終了したが、ボルトは4カ所だった。2ピッチ目5 cも簡単に見えたが、最初のボルトが真上にあったものの遠くに見えたのでゼロピンを取ってから登りだした。ところが確保の大和田から右側にボルトがあると声がかかった。ロープの流れが気になったものの、残置支点には全てクリップしないと減点になる。長めにランナーを取り2ピン目を見ると確かに直上するより、さらに易しいルートに見えた。かなりランナウトしていたがサクサクと登り、あともう一手でランナーが取れるという位置で中腰の姿勢になったときにスタンスが崩れ、ホールドも滑り、そのまま墜落した。大和田は瞬間的にロープをできる限り目一杯引いたとのこと。しかし、ランナウトしていたため6 mほどのロングフォールとなった。最初に確保場所右側付近に右わき腹から激突、「グシャ」という感覚があったので肋骨は折れたと感じた。身体が反転し、さらに落下、再度

岩に激突し確保が効いて停止した。「神経は大丈夫か」まず両手の指を親指から動かしてみる。大丈夫ようだ。足にも痛みはない。大和田の声がする方を見上げると額から生暖かいものが溢れてきた。

救助活動（以下、大和田の視点）

確保場所のやや右下方に停止し、意識を確認するため名前を呼ぶと、こちらを見上げた川嶋の顔面からみるみるうちに血が吹き出してきた。怪我の具合を尋ね、頭部、特に顔面からの出血がひどく、目に垂れてきており、目に損傷があるのかどうか一瞬見分けがつかない。よくよく顔を覗き込むと瞳が動いて視野は確保できているらしい。他にも、右肘からの出血も多量のようなのだ。ヘルメットは飛んで取付まで落下したものの、意識があることから眼球を含めて重大な頭部損傷はないと判断、確保場所まで引き戻し、間近で目と脊椎、頸椎などに損傷がないことを再度確認しセルフビレイを取らせ、対応を協議。

身体が小刻みに震えているので、背中をさすって息を整えさせる。川嶋から、「懸垂する前に、まず1ピン目にかけたクイックドロウを回収してほしい」と言われる。クイックドロウの心配をできるくらいなら頭や脊椎などへの心配はないものと判断。ここでベースの本部に事故発生の無線連絡をする。懸垂に入る旨を伝えるが、その前に1ピン目のクイックドロウの回収に行く。「この期に及んでクイックドロウなんて」とは思ったが、ショックを受けている川嶋の気持ちを落ち着かせるためにも、回収に行くことにした。本部では大和田が登攀を続けていると誤解し、無線で注意を受けるが応答できず。

川嶋の身体が小刻みに震え続けているため、ショックの大きさを感じ取った。だが、現在判

断できる受傷程度と意識レベルから介助懸垂の必要はないと見極め、川嶋に下降器のセットをさせ、間違いなく出来ていることを目視確認し、万が一途中で意識を失った場合に備えた。川嶋に後ろに引かれる旨注意を与えてから大和田がバックアップを取って懸垂。30 mを懸垂し取付点に着地、ロープをコントロールしながら川嶋を懸垂させる。

取付で再度怪我の確認。肘から血が流れ続けるため、手拭いで止血する。相変わらず川嶋の身体が小刻みに震え続けている。身体の震えはその後救急車の中でもしばらく続いた。取付で待機して、どう降りるか協議していたところ、カザフスタン本部レスキュー4人が到着。うち2人が装備を分担して運び、残る2人から介助を受けながらも川嶋は自力で歩いて山岳車両が待機している地点まで下降した。

アルマトイ市立病院へ

カザフスタンスタッフの運転する山岳用車両で、一度ベースに寄って報告してから救急車が入れる地点まで移動、ロープウェイの駅がある場所で救急車を待つ間に川嶋がトイレに行きたいと訴え、介助を受けながら30段ほどの階段を登り降りし、排尿を済ませて待機。救急車で現地アルマトイの中央公立第12病院に緊急搬送された。

この時、通訳としてスタッフが同行してくれた。救急車の中では一時川嶋の手が冷たくなり、顔色が悪く、意識混濁があり、見当識もなくなったが、17時25分に病院に着いた頃には意識回復し、CT、血液検査、尿検査、レントゲン、心電図など一通りの検査を終えた。結果、ヘルメットが飛んだものの頭と背骨に異常はなく、右肋骨が6本折れており、腎臓損傷、脾臓損傷、肝臓損傷などが疑われた。右肘、顔面5

箇所をそれぞれ数針ずつ縫合後、すぐ入院を指示され「入院しないならどうなるかは自己責任で」と言われる。当然「入院を選択する」と回答。

検査結果を待つ間も病院の対応は官僚的で「まず警察を呼ぶ」という。実際に警官がきて大和田が事情聴取され、主催者を訴えるかどうか何度も確認された。大和田の判断で、「本件は本人の過失であり、ロッククライミングをしている以上こうした事故は誰にでもいつでも起こる可能性があるので、結果を受け入れられない場合にはクライミングをしてはいけない、我々はその事実をよく理解している」と、通訳を通じて警官に伝え、お引き取りいただいた。

後で考えると、もしこれが日本人ではなく別の文化圏のクライマーだったら、主催者の罪が問われる事態になりかねず、国際的な催事の難しさを痛感した。

解説

事故の直接的な原因は、単純な足場の確認ミス。時間的な制約のある競技ということで急いでいたことと、傾斜も緩く易しい場所だったため、注意が行き届かなかった。

精神的な部分では、初めは各国の若い代表と競うつもりはなかったのに、韓国チームがルー



事故が発生した No 8 ルート

トを完登できず懸垂下降にも時間がかかっていたり、隣に登っているイランチームが想像していたより遅かったりしていたので「これは案外いけるんじゃないか」と力が入ってしまった。第1回という記念行事を応援するために参加をしたにもかかわらず、事故発生という影を落としたことは、なんとも残念な結果だと猛省している。

クライミング普及に向けて様々な課題も明確になったので、今後の活動に繋げていきたい。



事故者発見現場（赤城山）

遭難現場からの レポート

第五回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

遭難の教訓

☆この連載では、実際の山岳遭難事故をもとに、推測により教訓を引き出している。
疑問点などの問い合わせは全国連盟・遭難対策部へ寄せていただきたい。

備忘録⑤ 『単独』

○労山会員からの事故一報は昨年、これまでの最多を更新した。登山活動は自然の中で長時間行動し、気象条件に大きく影響される。遭難事故の可能性は誰にでもある。登山者は自ら不測の事態に備えなければならないが、組織（会・クラブ）に加入し、山行の管理を行うことで安全性を高めることができる。

しかし山行管理をしても、2007年1月下旬から3月初めにかけて、2件の道迷い遭難死亡事故が発生した。この経緯は登山時報2007年6月号に「緊急レポート」として掲載した。最近「山行管理ができない」「労山基金の山行規定がよく分からない」という声を良く聞くので再度、事故防止の教訓として取り上げる。

○群馬県／赤城山

1月28日の朝、待ち合わせ場所を間違えたSさんは、せっかく登山口まで来たのだからと一週間前に4人で登った赤城山（黒檜山）に再度単独で登ることにした。所属会の山行管理者には、計画の変更を携帯電話で伝え了解を得た。頂上までは順調に登り昼前には下山を開始した。ここで何らかのアクシデントがあり、往路に戻る予定が登山道から外れ西側の谷筋へと降りて行った。このときアイゼンにワカンを装着していた。やがて15mほどの滝上から滑落。頭部と胸部を負傷したが、ある程度身体が入る穴まで移動してビバークした。しかしその後、低体温症で凍死した。

日帰りの予定だったので、夜になっても下山連絡がなく山行管理者がメールで連絡したがつながらなかった。翌日の29日23時になり、家

族から「まだ帰宅しない」という連絡を受け、直ぐに捜索隊が出発し、深夜2時に登山口でSさんの車を発見。早朝4時に群馬県勤労者山岳連盟救助隊と警察で家族と打ち合わせをし、捜索活動に入った。県警へりも捜索したが30日は発見できなかった。

翌31日正午に所属山岳会の会員が双眼鏡でザックを発見。近くで事故者を発見し、県連救助隊がスケッドストレッチャーで車の入る場所まで搬送し家族と警察に引き渡した。

○兵庫県／氷ノ山

3月4日の午後、Bさんは日帰りで氷ノ山を往復する計画書を出して登山を開始した。途中の避難小屋に「3/4 17:09 小屋着、雪が少ない」と記載してあったので、おそらく頂上へは行かず小屋から下山した。その途中で何ら



スケッドストレッチャーで搬送（赤城山）

かの原因で登山道から離れ道迷いとなった。18時から19時の間に、京都在住の次女の携帯電話に5回「遭難している。滝のそばにいる。大変寒い。助けて。」という留守電を入れていた。その後は携帯電話が通じなくなった。留守電を聞いた娘さんから深夜、警察と所属会に連絡があり翌朝（5日）8時から警察を中心の搜索を開始したが、この日は発見できなかった。

5日16時に所属会から兵庫県勤労者山岳連盟救助隊へ出動要請。翌6日の朝8時から合同搜索を行った。その結果、県連救助隊員がザックと沢の中に浮いている事故者を発見した。そ

の後、県連のスケッドストレッチャーで登山口まで搬送して警察に引き継いだ。

解説

二つの事故には共通点が多い。

①50歳台の女性。②単独行。③地元の慣れ親しんでいる山域。④長い歴史のある山岳会所属。⑤発見・搬送は所属地方連盟救助隊が主に行った。

大きな問題となるのは連絡方法である。赤城山のSさんの場合は車の中に携帯電話を置き忘れていた。後日、私が現場を確認しに行っ

たところ電波は受信できた。滑落した後で移動していることを考えると携帯電話を持参していれば救助要請できた可能性が高い。また、会の山行管理者は下山連絡がないのでメールで問い合わせをしたが、返信がなかった。近場の日帰り山行ということで、それ以上の確認をしなかった。さらに同居している家族も、翌日の23時まで、帰宅しないことをどこにも連絡していなかった。このため初動が丸一日遅れることとなった。

氷ノ山のBさんの場合は、離れて暮らしている娘さんへ携帯電話で5回にわたり電話して留守録を残していた。いつメッセージを聞いてくれるのか分からない状況で、所属会の山行管理者や警察・消防には電話連絡しなかった。緊急時に行動判断を仰ぐことのできる人と連絡がとれれば、最悪の事態を防ぐこ



この滝ツボで事故者を発見（氷ノ山）



搜索する県警ヘリ

とができた可能性がある。

この二つの事故から分かるように、山行管理、特に下山連絡の重要性について、再度、所属団体内で確認していただきたい。計画書は提出しているが、頻繁に行っている短時間の山行や岩トレなど下山連絡を受付けていない場合も多い。所属会員が少なく全員で山行に行った場合や、逆に会員が多く、同じ日に山行が重なるため下山報告を管理しきれないという声も聞く。一人暮らしの方の場合、親族が遠方に居住していたり、山を知らない場合なども下山確認が不確実になりがちである。近場の短時間山行でも、単独の岩トレでも死亡事故は発生している。比較的に若い人でも心疾患で亡くなっている。組織的な山行管理により確実に安全性は高くなる。

労山の会・クラブに所属している、さらに地方連盟に加盟していることの最大のメリットは

山行管理にあると言っても過言ではない。下山連絡を受付けてくれる、山行中の緊急時に相談できる山仲間の存在は本当にありがたい。自分の安全をより高めるために、信頼できる山仲間を一人でも多く増やすことが大事だ。最近は携帯メールなどで手間をかけずに対応することもできる。是非、考えていただきたい。



発見された事故者のザック（氷ノ山）



奥秩父滝川の事故現場①

遭難現場からの レポート

第六回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

遭難の教訓

備忘録⑥ 『水難』

○魔境

2010年7月24日16時頃、埼玉県奥秩父滝川本流のブドウ沢出合手前で1名が水流に滑落、中州に引き上げたが心肺停止状態となった。東京都勤労者山岳連盟主催「沢登り教室」での事故だった。現場からはアマチュア無線も携帯電話もつながらず、講師と受講生の7名が事故現場で幕営し、翌25日朝の8時頃、リーダーとサブリーダー2名が稜線に出て110番通報と都連盟救助隊への救助要請をした。三ツ峠にい

た臼井救助隊長には留守電に伝言、瑞牆山でクライミングをしていた私は直接電話で救助要請を受け、沢登り用具を準備するために東京へ戻ることにした。急ぎ車を走らせていた私たちが笹子トンネルを通過する頃、埼玉県警秩父署の係長から「県警ヘリと防災ヘリの2機が出動し全員をピックアップする」と連絡があり、都連盟救助隊は出動待機となり、一旦は車のスピードを落とした。しかし小仏トンネルを通過した頃「救助ヘリが墜落した。現場に残ったメンバーの安否不明」との一報が入り、現地への出動となった。

7月25日15時、川嶋他4名が入渓地点に近い「出会いの丘」駐車場に到着。黒岩尾根を下山してきた事故パーティーのサブリーダーと三ツ峠から移動してきた臼井隊長他3名と合流したが、入山せずに秩父署で待機するように警察から指示を受ける。秩父署では取り調べ後に共同記者会見を行った。この間、事故者Aさんは自衛隊機で搬出され秩父署へ到着。残るメンバーは、稜線から下降し滝



奥秩父滝川の事故現場②

川本流に戻ったリーダーと合流後、沢を詰めて21時に雁坂小屋へ着いたとの連絡が入った。

墜落したヘリには5名の救助隊員が搭乗しており全員死亡。この日、もう1名が近くで亡くなっていた。山岳写真のブログ管理者が単独で危険地帯に入り込み50m滑落したのである。前日から単独で写真を撮りに来ていたとのことだが、事故現場を撮影しようとしたのか、本人が亡くなっているので詳細は不明だ。

26日には雁坂小屋に宿泊したメンバーを迎えに臼井・川嶋他都連盟救助隊員5名が出発。黒岩尾根の中間地点で合流後、下山。秩父市役所で共同記者会見後、警察署での事情聴取を受けて解散した。この遭難事故は2日間で7名が亡くなる大惨事となった。

ところが、これだけでは終わらず、7月31日には取材のため現場に入渓した日本テレビの記者とカメラマンの2名が遭難し、翌日、水死体で発見された。

わずかな期間に9名の命を飲み込んだ滝川本流のゴルジュ帯は、まさに魔境と言える。

〇解説

この滝川本流では過去にも死亡事故が発生

している。特に2006年に大学生が遭難死した事故では、救助に携わった関係者から遺体搬出についての苦勞話を何回か聞いている。

奥秩父の谷は上越や北アルプスなどの豪雪地帯の沢に比べると、入渓しやすく沢登りに精通しているリーダーがいれば初心者でも登れないことはない。雪渓の処理や滑落の危険性が高い草付の高巻などがないからだ。

反面、保水力の高い山肌は、その時期の降雨量により沢の水量が全く異なる。また、台風などにより釜や淵が深くなったり浅くなったりすることもあり、過去の経験が全く役に立たないこともある。現場で状況に応じた臨機応変の対応ができなければならない。

最初の滑落事故の直接原因は、フィックスロープを使って水流の上をトラバースしていくときに足を滑らし、手でロープを掴んでぶら下がるができずに滝つぼ（淵状の釜）に滑落したことだ。先行していた講師がロープを投げ、事故者はロープを掴んだが流れが速く引き上げることができなかった。後ろから他の講師が釜に入り引き上げようとしたが、これも引き上げることができず、下流にある4mの滝の釜に流してようやく引き上げた。事故者の宿泊装備を

入れたザックが浮いて、顔を水面に出せず、水没してから引き上げられるまで約15分が経過していた。呼吸ができず水を飲んだことによる溺死だったと考えられる。

○奥多摩、水根沢谷の状況

今年の6月には石川昌全国連盟遭難対策部長とともに奥多摩の水根沢谷へ入渓した。昨年、クラブの若手会員を連れて、沢登り講習のために水根沢谷を遡行したが、途中の淵が深く様子が変だったので引き返したところ、ネット上で「斜面の大崩壊があり、核心部の通過は危険」との情報が流れていた。その調査と講習を兼ねてクラブの若手会員2名も同行した。遡行していくと、核心部の突っ張りで登るトイ状の滝から上（2段大滝右壁を登る）は土砂と倒木に覆われて見るも無残な様子だった。ただし、その上流は少し倒木があるものの遡行には問題なく、半円の滝も健在だった。見本を見せるつもりで水流を跨いでブリッジで登っていったが、かなりヌメっており、いつになく安定しない。滝の落ち口まで来て「やれやれ」と左側へ移ろうとした瞬間に滑落した。これまで半円の滝を何度登ったかわからないが一度も落ちた記憶はない。瞬時に上向きになり、ウォータースライダーよろしく釜へ飛び込んだが、もちろん水深は深く足はつかない。ザックが頭を押さえて顔が水面に上がらない。平泳ぎで前進しようとするが、渦に巻き込まれ前に進まない。少し慌てたが、再度、反転して滝を見ながら背泳ぎカエル足で泳ぐと釜の縁に辿り着いた。ザックの中身は着替え一式を二重のビニール袋に入れてあったので浮力が充分にある。ハーネスにはカム・ナッツ



奥秩父滝川への入渓口

にハーケンとハンマーまでぶら下げてあった。ザックに頭を押さえつけられ溺れるとは、ということかと、まさに体験することになった。

○沢登りでの死亡事故

2010年以降の沢登りでの死亡事故は14件で16名の会員が亡くなっている。

特に教訓としてほしい4件6名の事故を記載する。

①山梨県、一ノ瀬川・大常木谷 2018年8月26日 男性（57歳）と女性（48歳）。

夫婦で大常木谷を遡行中、山女魚淵という大きな釜を男性が先行し、女性をロープで確保して突破させようとしたが、手間取っているうちに女性が渦に巻き込まれ水没。確保していた男性が飛び込んで救出しようとしたが、二人とも水没し、状況を見ていた単独行者が警察に通報。翌日、遺体で発見された。

②奈良県、芦廼瀬川・七泰の滝上部 2018年9月17日 男性（53歳）と女性（42歳）。

午前8時に遡行開始し9時に同ルート下降を開始。七泰の滝上部を渡渉中に大岩の下にある水中の穴に女性が吸い込まれ、男性リーダー



土砂と倒木に覆われた水根沢谷核心部

が探している時に同じ穴から吸い込まれた。警察と消防が捜索し9月19日に男性が穴から引き上げられたが死亡が確認された。女性は12月25日に下流のダムで発見され死亡が確認された。

③奈良県、大峰山系・前鬼川 2020年8月8日 女性(73歳)

14時頃、事故者は滝つぼに転落し救助される。遡行を打ち切り、登ってきた沢沿いに同下降を始める。2段10mの滝上部で右岸から左岸に飛び移るところで、水流に足をとられ10mの滝を転落。リーダーともう1名が両岸から手掛かりとなるようにロープを張っていたが、自己確保をしていなかったため、事故者とともに一緒に流される。ロープを張っていた2名は10m滝上の釜で岸に上がったが、事故者は100mほど下流まで流されて死亡した。

④奈良県、大峰山系・前鬼川 2021年8月1日 女性(54歳)

2段10mの滝上で渡渉中に足を滑らせてロープにしがみつくが、数秒後に手が離れ滝つぼに転落。ライフジャケットを装着して釜に浮いているところを引き上げて心肺蘇生をしたが回復せず溺死した。

①と②は二重遭難。リーダーがメンバーを助けようとして2人とも亡くなってしまった。

③と④は同じ場所、同じ状況で2年続けて死亡事故が発生した。教訓が生かされていないと考えることができる。事故は他人事、自分には起きないと私も考えてしまう。しかし、どれだけ技術と体力、経験があっても、事故が起きる可能性は誰にでもある。過去の事例を学び、常に想像力を働かせて、危険な状況に対応できるようにして欲しい。

遭難現場からの レポート

第七回

2008.11.26

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

遭難の教訓

備忘録⑦ 『海外』

○事故の増加

コロナ禍が収まるとともに海外山行が活発になってきた。それに比例して事故も増えている。2022年の4件から、2023年は9件、今年は9月までに13件発生している。特に著名な登山家の死亡事故が続いて暗澹たる思いだ。私が2004年に労山の専従職員になってから、昨年までの20年間に海外山行で死亡・行方不明になった労山会員は17名になる。その中には一緒にK2の山頂に立ったM氏がいる。「次はロー

ツェからチョモランマの縦走をやろう」と約束してから3年後の2007年、単独でチョモランマを目指し北稜C2で亡くなった。アルパインクライミングをやりたいと言って同じ会に入ってきて、八ヶ岳や 鹿島槍・剣の積雪期岩稜を共に登ったK氏も、2013年にダウラギリI峰から帰らぬ人となった。2人とも、まだヒマラヤの標高7700m付近にいるはずで、連れて帰りたいという思いが込み上げる。もう1人、新しいクラブを立ち上げ、東京都連盟救助隊でも困難な救助活動を協力してこなしたA氏は、遺骨となってしまったが、ニュージーランドま

で迎えに行き帰国させることはできた。以下はその教訓である。

2008年も押し詰まった12月2日未明に、外務省邦人保護課から私の携帯電話に連絡が入った。日本人パーティがマウント・クック（アオラキ）3754 mから下山していない。現地の警察が捜索を始めた。労山のパーティではないか？との連絡だった。このような問い合わせが時折私の携帯に入る。海外山行の場合、所属団体や留守家族に計画書を残すことはあっても、外務省や現地の日本大使館や警察などに届けることは少ない。大きな遠征隊以外の個人山行の場合、現地で登山計画書を受付ける習慣も届け先もないので、旅行代理店や現地ガイドなどが関わっていないケースでは、遭難事故が発生しても誰がどこでどうなっているのかを確認できない。宿泊施設などから日本人が戻らないという連絡が入り登山者らしいとなると、毎年300件以上の海外山行計画書を受付けている労山事務所に「お宅の会員ではないですか？」と連絡が入ることになる。

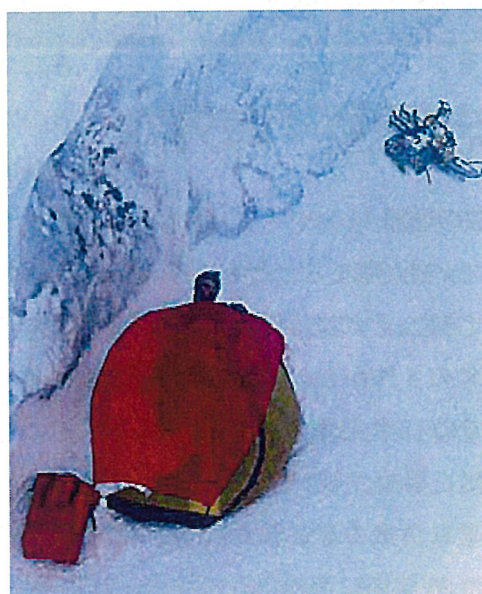
何回も繰り返すようだが、山行計画書は警察や全国労山、所属団体のために出すのではない。自らの安全性を高めるために出すものだ。山行中に不測の事態が発生した時に、できるだけ早く救助に来てもらうことの重要性を考えてほしい。

このケースでは英語の計画書を、宿泊した小屋に残してきたので救助活動はスムーズに行われた。2名パーティでグランドトラバースを4日間で踏破する計画だった。亡くなったリーダーのA氏はプロの山岳ガイドで、マウント・クックは何度か登頂し2003年にはツルブリッゲン稜での救助をした経験もあった。3日目に山頂を越えて安全地帯まで辿り着く予定だったが、時間がかかり11月28日にミドルピー

ク手前で幕営。以降、悪天で6日間動けず、6日目に^{あられ}霰の降雪でテントが潰され雪中ビバークし、7日目の12月5日に救助ヘリで助けられたが、同行者のN氏は凍傷のみで生還したもののA氏は亡くなった。

直接の原因は悪天候である。過去には同じ場所で14日間ビバークした記録も残っている。しかし、このケースでは軽量化のため、ガスボンベや食料を減らしスコップを携行しなかったことも、遭難する大きな原因となった。最も残念なことは5日目に強風の中、ヘリが強行出動し救援物資（無線機・食料・燃料・スコップ）の投下に成功したが、それに気が付かなかったことだ。テントのすぐ横にあったが、入り口の反対側で回収することなく、その後の積雪に埋もれてしまっていた。停滞中の体調管理など、生還するための対策はいくつも考えられるが、救出される6時間前までは会話をしていたそうなので、生死を分けたのは運命だったのかもしれない。

ニュージーランドでは環境管理局がプロの山岳救助隊を組織していて、公的な搜索救助活動

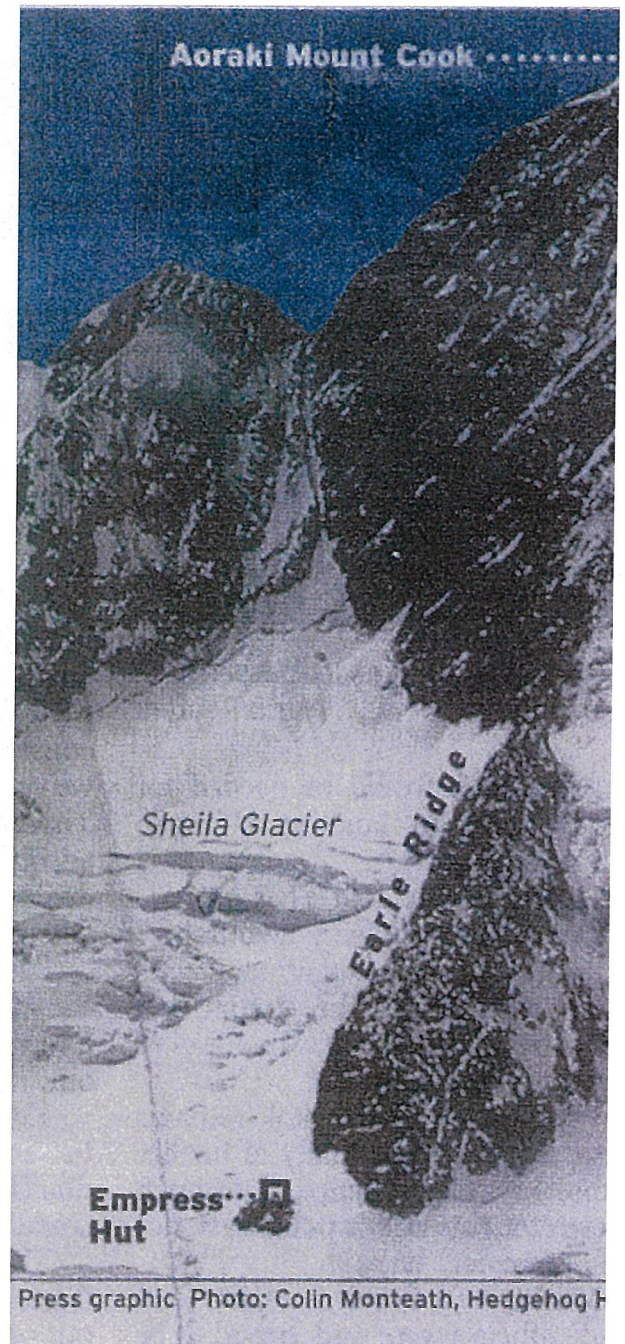


左下にあるのがヘリから投下された救援物資、顔を出しているのが亡くなったA氏、右上はアイゼンなどギア類

が整っている。12月2日に連絡を受けてから、遭難者の所属クラブとしては救助活動への参加要請はないものの、家族に同行して現地に行く必要があり、その準備とマスコミ対応に追われた。現地では新聞の一面トップで遭難が報道された。12月5日早朝、外務省から2人をヘリでピックアップしたが、1名は死亡、1名は凍傷で入院との連絡が入った。12月6日、私は亡くなったA氏の家族と共にクライストチャーチへ向かった。12月8日、A氏の葬儀と火葬を現地で行い、生還したN氏と警察署で記者会見を行った。翌9日にはA氏の遺骨とともに日本に帰国することができた。

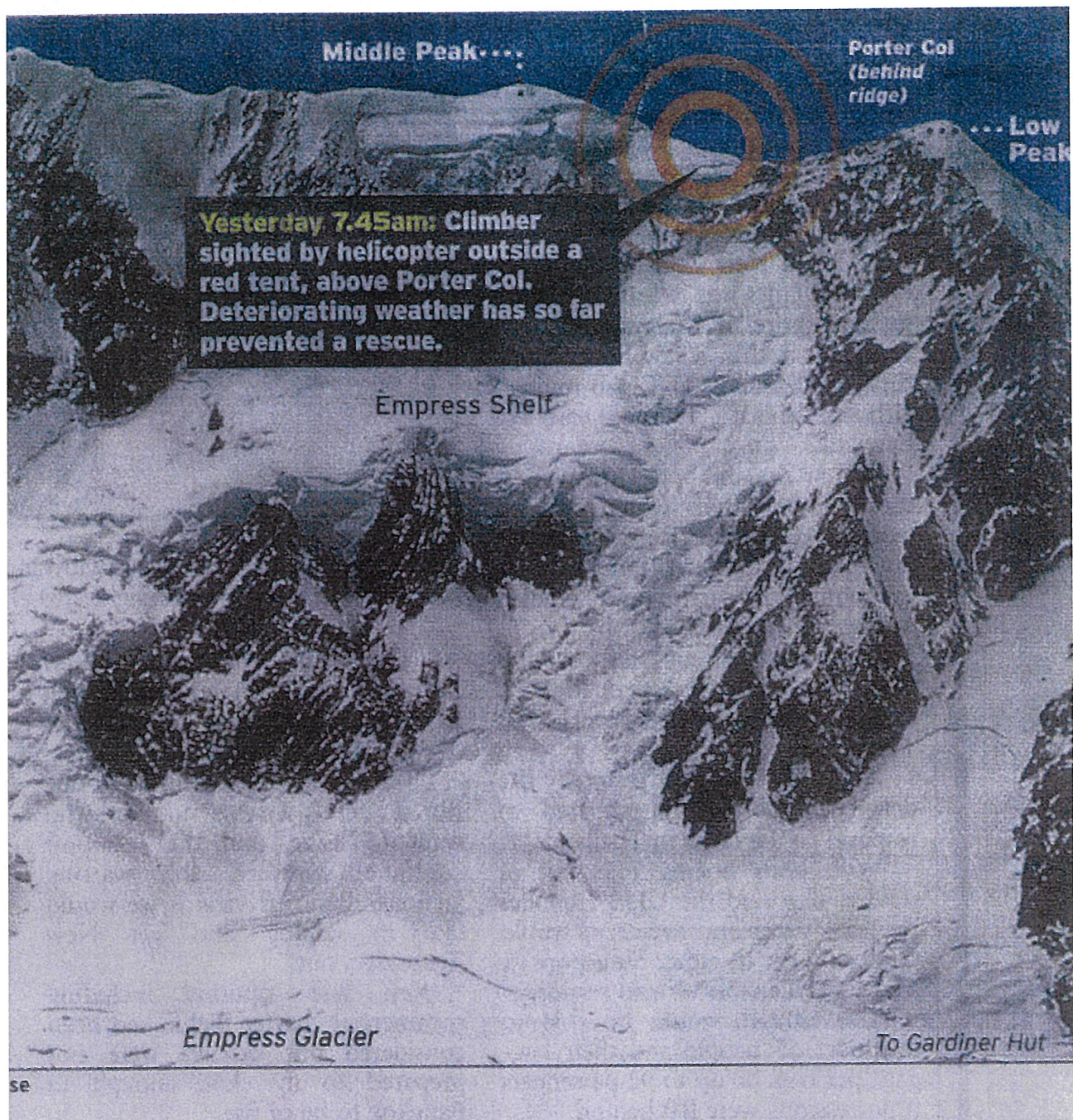
このとき文化の違いを感じるようになったので参考までに記載する。ニュージーランドでは独自の事故補償制度があり、ヘリコプターなどの救助捜索費はもちろん、入院治療費や葬儀・火葬費用まで無料だった。記者会見はオーストラリアから海を越えて取材に来た記者も参加していたが、生還をたてる内容が多く、亡くなった原因などに言及することはほとんどなかった。ニュージーランド航空は空いているからと遺族をビジネスクラスの席に座らせてくれ、空港では職員が出迎えてくれた。遭難事故を非難するのではなく、山岳登攀者をアスリートとして評価していることをしみじみと感じた。

イタリアのドロミテでも同じようなことを感じた。ドライチンネのチマ・ピッコラ、イエローエッジを登った際、順番待ちや雷雨などがあり、宿泊先のオーロンゾ小屋には深夜の帰還となり夕食の時刻を大幅に過ぎてしまったが、部屋の前には夜食が置いてあった。翌朝、お礼を言うと、食べることができなかった夕食分を翌日の昼食券で用意してくれた。クライミングを良く頑張ったね、という励ましと受け取れ、



うれしく感じた。

労山基金は商業保険と異なり、危険度による交付金額についての差はない。特に海外では、旅行会社主催の安全なトレッキングも8km峰の未踏ルート登攀も同じ金額が交付される。登山文化を発展させるためには困難で挑戦的な山行も必要で、これに挑む登山者を応援する意味からも、少ない寄付金で大きな交付金額を受けることができるように考えられている。



遭難を伝える現地の新聞記事、連日一面トップだった

1万円(10口)で1年間、死亡・傷害交付金額が最大200万円、救助捜索費が最大400万円まで対応できる民間保険はない。ピオレドールを受賞するようなクライマーが労山会員になる理由でもある。この事故の1年後には南米パタゴニアのフィッツロイで単独登攀者の墜落事故があった。海外山行のために労山会員になって、まだ1か月も経っていなかった。この時は救助ヘリコプターを要請するのに、事前に数百万円

の支払いを要求されたが、救助できるかどうかはわからないとのことだった。所属団体からの依頼で事前に救助費用を振込、何とか遺体の回収はできたが、救助捜索費の300万円(当時)と死亡交付の200万円のほぼ全額を交付した。この事故がきっかけで、海外山行は労山基金に新規加入後1年間経たないと交付されないこととなった(5000m未満のトレッキングなどを除く)。



関東雪崩講習会での積雪断面観察

遭難現場からの レポート

第八回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

遭難の教訓

備忘録⑧『雪崩』

雪崩事故を防ぐための講習会に携わって30年以上の時間が経った。この間、私自身が雪崩事故に遭遇したことはないが、頭から離れることのない事故の記録がある。いずれも今年で32回目となる関東雪崩講習会に関連する事故である。以下いくつかの事例を記載する。

〇八ヶ岳での生還

1998年の1月11日の朝、八ヶ岳・横岳西壁の日ノ岳稜末端付近のルンゼを3名でラッセル中に雪崩に遭遇したパーティーがあった。彼ら

は翌週には労山関東雪崩講習会の実技に参加する予定だった。1名が完全埋没、2名は自力脱出した。直ぐにビーコンで位置を特定し、15分後には身体を掘出し1名が心肺蘇生を開始、1名は救助要請に小屋へ向かった。埋没者は意識を回復し生還。この貴重な体験は翌週の講習会で詳細に報告された。

私が労山の雪崩講習会にかかわってから10年程が経っていたが、完全埋没の登山者をビーコンで捜索し生還させた最初の事例ではないかと思う。使用していたビーコンは唯一の国産アルペンビーコン1500で、当時は距離や方角

を示すデジタル表示は無く、音とランプの数による検索方法だった。埋没が浅かったとはいえ、講習を受ける前によく場所を特定することができたものだと感心した。ただ懸念すべき点はいくつかある。まず、講習のために購入したばかりのプロープは組み立て方が分からず、深い埋没には対応できなかった。また二次雪崩を全く想定していなかったのも、埋没地点を特定してからは、ストラップを外してビーコンを雪面に放置して掘出を行っていた。ルンゼが二股になっている場所で発生した雪崩だったので、二次雪崩が発生しなかったのは幸運以外の何物でもない。この生々しい報告を直接聞いた当時の受講生と講師には、インパクトの強い講習になった。

○北岳、大樺沢

2004年の大晦日に北岳大樺沢で発生した雪崩事故は、関東雪崩講習会の受講生だった。

3名パーティの内2名が自力脱出。半身埋まっていた1名を掘り出している最中に第2波の雪崩が発生し、埋まっていた1名は完全埋没となった。何とか脱出した2名が完全埋没した1名の位置を特定して掘出している最中に第3波

が来た。幸い小規模だったので、流されずに掘り続けたが、この時点ですでに30分が経過していた。腕は出てきたが反応は無く頭部はザックの下で雪の中だった。その時、第4波の雪崩に襲われ掘り出していた2名も20mほど流されて、二重遭難の危険から掘り出しをあきらめるしかなかった。ビバーク地点を探している最中に、さらに規模の大きな第5波の雪崩が発生した。2名は二晩のビバークに耐えて1月2日にヘリコプターで救助された。埋没者は雪崩救助犬を含む多くの人々の協力と搜索の上、雪渓の中から7月20日に発見、翌日に収容された。

なぜ登ってきた池山吊尾根を下山せずに大樺沢を下りたのか？「俺はいったい何を教えていたんだ」と関東雪崩講習会で主任講師をしていた私は、自問自答することになった。沢筋が危険なことは伝えた。積雪の少ない八ヶ岳でも沢筋で雪崩事故が発生していることは机上講習で説明したはずである。尾根筋のみのルート計画だったため、ビーコンもプロープも持参していなかったのは残念と言うしかない。10回を数えていた関東雪崩講習会で、これからどのように教えれば死亡事故を無くすことができるのだろう。今でも試行錯誤が続いている。

るのだろう。今でも試行錯誤が続いている。

○那須雪崩事故

2017年の関東雪崩講習会では、民放のテレビ局から取材の申し込みがあり、撮影スタッフとともに実技講習を行った。講習会は天候にも恵まれ、ニュース番組の片隅ではあったが放映もされた。これで少しでも雪崩事故が減ってくればと思って、いた矢先の3月27日、那須で雪崩事故が発生した。高校生7



テレビ局の撮影（谷川岳天神平）

名と20代の教師1名の8名が亡くなるという大惨事となった。栃木県高等学校体育連盟登山専門部主催の春山安全登山講習会で、生徒46名と教員9名の合計55名が参加していた。8名の死亡以外に40名の重軽傷者も出した。雪崩教育に長年関わってきたものとしては他人事ではない、痛恨の事故と言える。

翌日から私は石川昌遭難対策部長と分担してテレビ局の報道番組に出演し、事故原因について話をして来た。4月25日にはテレビ局の現場取材に同行して事故現場へも行った。その日は快晴だったが、「ここで降雪中にラッセル体験をしたのか」と暗い気持ちになったことが昨日のように思い出される。そして翌年の関東雪崩講習会には、何とこの事故で雪崩に埋まり1時間後に救出された高校生が参加した。後にも先にも唯一の現役高校生の参加だった。昨年に続いてテレビ局の取材も入り、天気にも恵まれて予定通り終了したが、全員が無事に帰宅してくれるまでは緊張がとけることはなかった。光明を感じるのは、若くして山岳遭難事故で生死の境を彷徨っていても、山に登り続けてくれているという事実である。

自然の中で活動する登山や山スキーなどのアウトドアスポーツで100%の安全を確保することは難しい。しかし、できる限りの安全対策をして活動をするべきであり、そのための講習会はどうやって運営すればよいのか？マンツーマンで毎週のように山行を共にすれば、ある程度のことは教えることができ、身につけてもらうこともできる。だが、実際にそのような条件と状況はめったにない。

現在登山では、全国10カ所で地方雪崩講習会を開催している。どこも講師不足で厳しい運営をしているが、雪崩で亡くなる人が一人でも少なくなるように、継続して欲しい。



那須の事故現場での献花台



那須の雪崩事故で先頭が目撃した天狗岩



那須野事故現場で倒れていた木



劔岳八ツ峰Ⅶ峰岩壁群

遭難現場からの レポート

第九回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

遭難の教訓

備忘録⑨「救助」

○初めての救助活動

黒い塊が落ちてきた。続いて人が目の前に降ってきたかと思うと、5mも離れていないテラスの端に当たり、さらにシュルンドの中に消えていった。

ここは劔岳八ツ峰Ⅶ峰Bフェースの取付きだ。1980年の7月、K大山岳部の夏山合宿に参加していた私は、遭難事故の現場に初めて遭遇した。落ちてきたのは九州のA大山岳部の二人。この山岳部では伝統的に地下足袋にドカ

ヘルで岩登りをしていた。フォローがロープにぶら下がり、リーダーが確保できず、自己確保の支点としていた這い松も根っこから抜けて50m以上落下したらしい。周囲にいた登山者が集まってきた。私たちも登攀を中止してシュルンドの中に下降した。一人はうめき声をあげていたが、もう一人は全く動かず、頭から出血していた。20人以上集まってきて、三角巾で手当てするもの、無線機で富山県警に連絡するものなど、各自が自主的に救助活動に当たっていた。私は、たとえば、先輩二人とともに見ただけだった。そのうちに県警からの連絡

で、熊の岩からヘリでピックアップするので、二人をそこまで搬送することになった。人数は大勢いるが、雪渓からガレ場を通過して数百mの距離がある。どうやって運ぶのか？しばし沈黙が流れた。

私が救助活動に関わるようになってすでに半世紀近く経ったが、レスキューの講習会を初めて受けたのは19歳だった。まさしく今回発生した事故の前年、東京都連盟の登山学校で現在の臼井労山基金運営委員長に基本的なレスキュー技術を教わっていた。先輩に「ザイル担架を作ればいいのか」と、緊張気味に伝えた。習ったばかりの技術ではあるが、「では、おまえが作れ」ということになった

た。もちろん、本番で作るのは初めてだった。冷や汗をかきながらなんとか作り終えると、もう一つ作れということになった。私以外はザイル担架を知らなかった。さらに左右に5人ずつが就いてスリングを肩と腰から廻してタスキ掛けにし、カラビナをザイル担架のロープ2本に架け高さを調整することまでやった。これが結構上手くいって、雪渓で一人ぐらい転んでも、担架に乗せた要救助者を落とすことなく、無事に熊の岩まで二人を運ぶことができた。

劔岳での初登攀はお預けとなったが、丸一日かかった救助活動は不思議に満足感があり、真



前穂高北尾根Ⅳ峰

砂沢ベースキャンプで余韻に浸っていた。しかし、暗くなってから他の大学山岳部から「残念ながら一人は亡くなった」と連絡があり、なんともやるせない気分となったことを未だに忘れない。

○パートナーの救助

1980年の大学山岳部夏合宿（劔岳と穂高岳）は予定通りに終了し、その年の秋にはS先輩と二人で奥多摩の越沢バットレスへ岩登りに通っていた。ある日、左ルート2ピッチ目のクラックに登っている先輩が滑落。中間支点をクラックの下で取っていたため、足から緩傾



前穂高北尾根IV峰正面壁の核心ハング

斜帯に落ちて、横になり5mぐらい転がって止まった。声をかけても返事がなく、ロープを固定し確保からの脱出をして、プルージックで登り返し、事故者のところに辿り着くと、意識を取り戻していた。他のパーティが協力を申し出てくれたので、ありがたく手伝っていただき、取り付けまで介助懸垂で下降。その後はザイルを二つ輪にして事故者を背負い、救急車の入る車道まで歩いた。背中で「夏合宿はどうなるん

だ」と話しかけるので「頭を打っているのか?」と思うと涙が出てきた。足首を複雑骨折したS先輩は、その後は山から遠ざかっていった。

○奥又白合宿

1982年8月、N山岳会の奥又白合宿は無事に終了し、私たちは滝谷へ移動しようとしていた。前穂高東壁右岩稜古川ルートと前穂高北尾根IV峰正面壁北条新村ルートを快適に登ることができ、今日はアルバイトをしていた北穂高小屋まで移動するだけだ、と気楽に構えていたが、K山岳会のN氏から救助要請が入った。共に東京都北部勤労者山岳連盟の救助隊員として活動していたので、予定を変更し救助活動に参加した。

N氏は前穂高IV峰東南壁RCCルートを登攀中にパートナーが落石事故に遭い、現場で動けない、とのこと。とりあえず現場へ行き、ボルトを打ち足して確保支点を補強した。事故者は腰の打撲で、考えていたより元気だった。事故者を腹に乗せて約20mを他人懸垂で降ろす。雪渓に着いてからはザイル担架を作り、前の一人が方向を決め、後方の二人がロープで確保しながら降ろしていく。その後は徳澤園から登り返してきたN山岳会の



A 沢から奥又白池を見下ろす

本隊（北部連盟救助隊長など救助隊員6名）が合流し、奥又白池まで搬送した。

奥又白池からの搬出はヘリを要請することになった。まだ公的なヘリが普及していなかったが、費用が掛かっても人力で降ろすより安全だと思った。それは北穂高小屋への荷揚げで何度も見た東邦航空ヘリの飛行技術から想像できた。一泊した翌朝、天気は快晴となり、慌ただしく他のパーティにテントをたたんでもらい、ヘリのピックアップに備えた。ヘリの搬送はあっという間だった。

○解説

労山会員となり、登山学校で救助技術を教わってから、立て続けに岩場での救助活動に参加した。当時はハンマー、ハーケン、カラビナを三つ道具と呼び、重いが必須の装備として持

参した。さらにボルトを打つためのジャンピングセットも持って、岩場に行った。

救助活動では支点を確実に補強しなければならない。北穂高小屋のアルバイト中に鎖場の補強でボルトを何本も打っていたのが役に立った。雨具やザック、ロープなどあるものを利用しての背負い搬送は、技術以上に体力が必要だった。担架はツエルトやザック連結でも作ることができる。しかし、傾斜が急な雪渓を降ろす時は制動が効くザイル担架が有効だった。

今回の事例は事故現場にいるものが参加するコンパニオンレスキューだ。現場に多くの登山者がいても知識と技術そして体力がなければ役に立たない。万が一の時に備えて少しでも救助活動に関われるように常に学習しておきたい。



遭難現場からの レポート

第十回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

遭難の教訓

ヘリコプターに収容される傷病者

備忘録⑩「疾病」

眩暈のする夏

「調子が上がらない、先に行ってくれ」と一人が言い出した。

このパーティーは3名で登山中だったが、Aさんが遅れBさんCさん2名が先行した。7月初めの上越、平標山への斜面は高山植物が咲き乱れている。しかし、お昼頃の日が射す登山道は暑い。ゆっくり小屋を目指していると、後ろから追いついてきた登山者から「同行者の方が倒れている」と連絡を受けた。急いで戻るとA

さんが仰向けで倒れている。呼びかけても返事がなく呼吸も確認できないので、他の登山者と共に心肺蘇生をする。1分間に100回の胸部圧迫はかなりの重労働だ。そのうちBさんが胸部圧迫中にうずくまるようにして倒れた。日も暮れてきて視界も悪くなったため、担架で2人を山小屋へ搬送。翌朝未明から下山を始め救急車で病院へ搬送したが、急性心不全で二人の死亡が確認された。労山会員のBさん64歳、男性。(Aさんは会員外)

同じ日の同時刻、兵庫県神戸市の烏帽子岩では、関西最難の10Dと言われる「タフ」に登

攀していたクライマーが、核心部を超えて4ピン目にクリップしたところで、動かなくなった。周りにいたクライマーが協力して下に降ろし、ヘリで病院へ救急搬送されたが、急性心不全で死亡が確認された。52歳、男性。

さらに翌朝、岩手県の焼石山ではMさんが、登山口から20分程登ったところで急に立ち止まり「眩暈がする」と言って倒れた。顔面蒼白、瞳孔が半分開き、意識も脈もないため胸部圧迫を開始。30分後には偶然通りかかった医師2名も参加し、救急隊が到着してからは気管挿入、AEDも装着した。その後、救急車とヘリで病院に搬送したが、急性心筋梗塞で死亡が確認された。74歳、男性。

この9日後にも越後駒ヶ岳で急性心不全により死亡事故が発生した。この日も暑く、東京では外に出ると眩暈がするぐらいの気温だった。2人で入山したが1人が遅れ単独行動になった。そして他の登山者に倒れているところを発見された。68歳、男性。

原因が「病気」の死亡事故

私が全国連盟理事になった2000年から今年まで26年間、労山会員の山岳遭難死亡・行方不明事故は224名に上る。その内、病気が原因と思われる死亡事故は40名だ。実に2割近くを占めている。検死した医師によると、33名が心疾患だという。さらに男女別では男性が36名、女性が4名と圧倒的に男性が多い。年齢は30代1名、50代12名、60代15名、70代10名、80代2名で平均年齢は64.8歳だ。高齢化社会となった日本では、50～60歳代は働いている人も多く、現役世代と言える。

労山会員の山岳遭難事故全体では「転倒」や「転滑落」が圧倒的に多く、最近はそのに「虫や動植物」が増えてきた。「病気」は毎年2%

前後の発生率で推移している。しかし、死亡事故に占める割合は非常に多い。つまり山で病気になる可能性は高くないが、発病すれば命にかかわるということだ。だから、自分の健康状態は常日頃から管理して不調を軽視せず、体調を万全にして山に向かって欲しい。

なぜ男性が多いのか

これは私の個人的な推測だが、亡くなっている男性はリーダークラスの経験者が少なくない。地方連盟の現役理事長も2名含まれている。単独になって他の登山者に発見される事例もあるが、パーティリーダーとして少しぐらい調子が悪くても「俺がいなければ山行自体が中止となる」と考えて、無理をするケースがあるのではないと思う。中にはメンバーの女性による救助要請を拒否したり、治療中にもかかわらず「ニトログリセリンを持っているから大丈夫だ」と言って亡くなった事例もある。

以前、労山会員の道迷い事故を調べていたら、道迷い遭難で死亡したのが全員女性だったことを思いだした。すると私が全国役員になったころベストセラーになった『話を聞かない男、地図が読めない女』というタイトルが頭に浮かんできた。

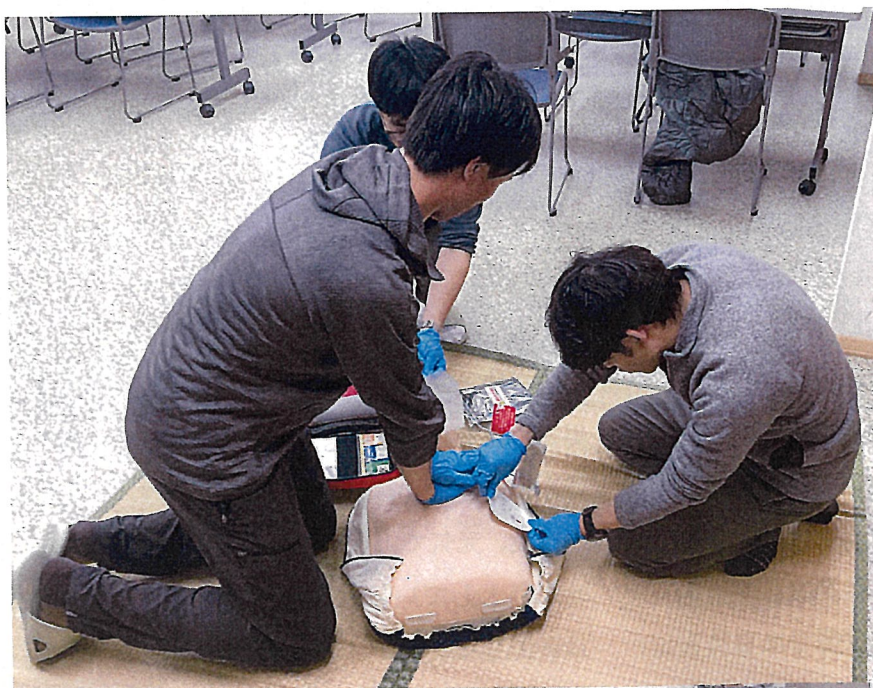
普段、元気で山行計画を立て参加者を楽しませようとしている世話好きの男性諸君！筋肉は裏切らない、トレーニングをすれば筋力・体力は維持できるといっても、加齢による衰えは気づかないうちに忍び寄ってくる。目も耳も反射神経も若い頃とは違うことを認識しよう。私は一昨年、カザフスタンで滑落事故を起こし、三途の川に片足を突っ込んで、「もう若くはない」とつくづく感じるようになった。

余談だが、最近では山行中以外でも自家用車の運転などに、より一層注意をするようになった

た。クライミングと同じく、車の運転による事故は他人を巻き込むことも多いからだ。高速道路の逆走事故が報道され、「なんでそんな馬鹿なことをするんだ」と他人事のように思っているといけない。体調を万全にしてこまめに休憩を取ることが大事で、余裕を持った計画的な運転を心がけたい。

救急救命法

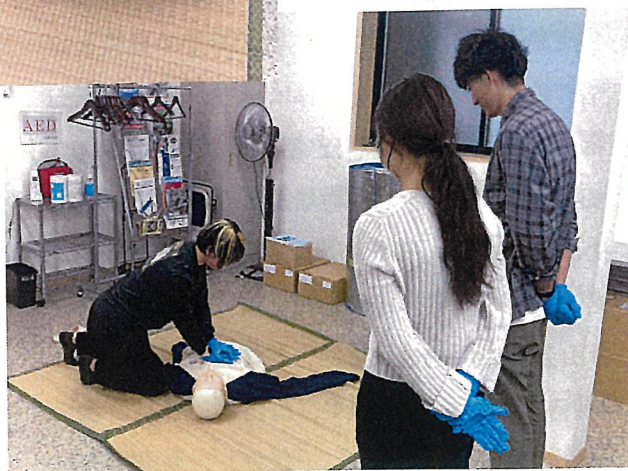
突然の心停止に対処するためには、胸部圧迫とレスキュー呼吸、早期除細動が生死を分けることになる。兵庫県の六甲山では心肺停止状態になった登山者に、偶然通りかかった3名の看護師がAEDの到着まで心肺蘇生処置を行い、一命をとりとめた報告も届いている。



MFA 講習会

労山事務所ではメディング・ファーストエイド (MFA) の講習会を毎年開催している。今年は4月に30歳前後の男女6名(労山会員外)の希望により開講した。未組織の知人同士だが、雪崩講習会を受講した時に「救急救命法の基本講習受講を勧められた」とのこと。1人、12,000円の受講料を払って労山のMFAプロバイダー講習会を熱心に受講していた。

できれば年に一度は救急救命講習を受講して備えて欲しい。これは登山活動中以外の日常生活でも、身近な隣人のために身につけておきたい。生きると死ぬのとは大違いだ。少しでも生存の可能性が高くなる技能は繰り返し習熟するようにして欲しい。



2000 年～2024 年 事故一報に基づく疾病死亡一覧

連番	事故発生日	地区名称	年齢	性別	発生時刻	山名	山行形態	原因名	事故の状況	傷病名
34	2020年 4月27日	栃木県	78	男性	12:10	きのこ山	無雪期登山	病気	参道で突然に前向きに倒れた。口が痙攣していたのでこれは一大事とすぐに心肺蘇生法（CPR 講習会受講者 2 名）を交代交代に行う。この間本人に呼びかけるも反応なし。救急車が 1 時に到着したので、CPR を交代。この間 AED や点滴、心肺蘇生などの措置を施していたが、30 分後にドクターヘリを手配。1 時 55 分にピックアップして救急病院にヘリ搬送。17 時 50 分家族立ち合いのもと心筋梗塞で死亡と検死。	死亡 心筋梗塞
35	2020年 4月27日	滋賀県	79	男性	不明	湖南アルプス	無雪期登山	不明	湖南アルプス、矢筈ヶ岳～太神山へ O 氏、S 氏と 3 名で無届登山。途中、矢筈ヶ岳付近で、一人遅れ、その後行方不明。S 氏から警察へ捜索依頼。当日から警察・消防による捜索開始。翌日から山岳会有志が捜索に参加。2 日後の 5 月 1 日、午後 2 時半頃、一般登山道から外れた沢でうつ伏せ状態の遺体を会員が発見。その日のうちに搬出完了。	5月1日 遺体で発見
36	2021年 11月4日	岐阜県連	80	男性	13:20	竹屋谷溪谷	無雪期登山	病気	沢沿いの登山道で滝の見学に行った帰り道、蜂の襲撃に合い 3 名が刺された。本人も蜂を手で払っていたが、約 10 m 歩き突然座りこんだ。呼びかけにも反応がなく、胸部圧迫を行い救急要請できる場所まで出た。40 分後に救急車到着。蜂（地蜂）の刺傷はなかった。	死亡 心筋梗塞
37	2022年 2月27日	宮崎県	64	男性	11:30	大崩山系 銚岳	無雪期登山	病気	11 時 10 分頃、銚岳山頂手前で、急に前に倒れ、すぐに救助要請と心臓マッサージを開始。通りがかりの男性も加わり、3 名交替で心臓マッサージをしたが、心肺停止。ヘリが到着したのが、1 時間後の 12 時 10 分 病院に搬送。	死亡 狭心症による心筋梗塞
38	2023年 2月5日	石川県	75	男性	8:20	白山山系	山スキー	病気	ゴンドラ山頂駅から歩き始め、後続が来ない為、300m 戻って探し倒れている事故者を発見。ヘリ搬送する。	死亡 虚血性心疾患
39	2024年 8月28日	東京都	76	男性	11:00	妙高山	無雪期登山	病気	27 日朝から登山を開始し、妙高山登山後、下りで他の会員が遅れ、それに付き合って行動。黒沢池小屋にいたのが、夜 8 時ごろで、食欲がないといい、夕食を取らずに、すぐに就寝。夜中は息苦しそうで、朝はトイレに行くにも休憩しつつ行く状況。天候が悪くヘリが飛ばず、消防隊が駆けつけてくれたが、死亡が確認された。	死亡
40	2025年 4月26日	静岡県	60	男性	14:30	北アルプス 澗沢	積雪期登山	病気	澗沢ヒュッテ手前の登山道で「ヴ」か「ア」のような声を出して倒れた。後続の登山者が山岳救助隊を呼び 15 時 20 分ヘリで搬送。病院で 16 時 33 分、死亡。	死亡



遭難現場からの レポート

第11回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

幽ノ沢、全景。中央に左俣大滝、右端がV字状岩壁

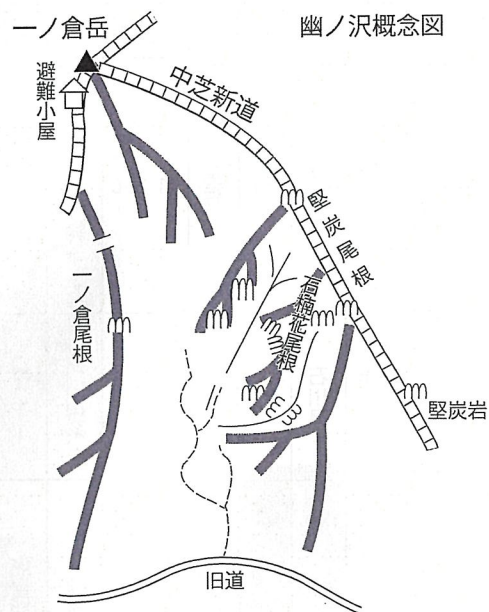
遭難の教訓

備忘録⑪『出勤』

幽ノ沢V字状岩壁右ルート

今回は救助された事故者の回想から始めよう。

——1993年秋、アクシデントは4ピッチ目の終了点で発生した。通常、ここでセルフビレーを取る。しかし、この時は先行パーティがリードの確保をされていて空いている支点が少なかった。とりあえずハーケン1本にテープスリングをかけた。そこまでは覚えているのだが、何故



落ちたかとなると、その瞬間だけ記憶が無い。分かっていることはセルフビレーを取る前に落ちた、ということ。

この日、谷川岳は快晴だった。カールボーデンから見上げるパノラマは、中央壁やV字状岩

壁を囲むように紅葉が映えていた。私たちは3人パーティで2番目に取付いた。後続も数パーティいた。下部3ピッチは易しいのだが、先行パーティにはかなり待たされて緊張感が薄れた。事故はこんな時に起きるものだ。

滑落した斜面の傾斜は緩かったが、身体は宙を舞い腰から落ちて止まった。何とか支点まで登り返し、怪我の状態をみると、右腰が痛く右腕とわき腹から出血していた。同行者のひとりにこのピッチの終了点まで登ってもらい、ユマーリングで続いた。さらにワンピッチ登ると広いテラスに出たものの、自力下山は無理と判断してビバークを決める。他のパーティから無線を借りて救助要請。同行者二人のうちひとりを他のパーティにゆだねて下山させ、救助の手配を依頼する。残る我々二人は16時半にツェルトを被るが、夜間に降り出した雨が強くなり、身体が濡れて震えが止まらず、一睡もできずに翌朝を迎えた。

救助隊出動

事故当日18時に谷川岳登山指導センターから事故の第1報が所属山岳会に入る。当時、東京都勤労者山岳連盟救助隊の事務局長だった私にも出動要請があり、隊員を招集し救助に向かうことを決めた。21時に私、川嶋の自宅のある所沢に9名が集合し、隊長に指名されて現地に向かうことになった。今まで山行中に事故があり、救助活動に参加することはあったが、自宅から出動するのは初めての経験だった。

2台の車に分乗して現地に向かうが、途中から雨が激しく降り出してきた。ビバーク中の2人は大丈夫だろうか？テラスから流されたりしないか？胸がざわめく。ギリギリその日のうちに指導センターへ着く。下山した事故パーティ

の会員から事故の状況を聞く。指導センター職員のア氏と救助方法を打ち合わせる。要救助者と合流するためには幽ノ沢を詰めて、取り付きから登るのが確実だ。しかし時間がかかる。中芝新道を登り、堅炭尾根の終了点から下降したほうが、早く合流できる。群馬県警谷川岳警備隊はヘリで堅炭尾根に降りて、ウィンチで引き上げるとのことだった。ただ、堅炭尾根の終了点が分かるのか？V字状岩壁の5ピッチ目のテラスへ上部から間違わずに降りて行けるのか？不安がよぎったが、登ってきたばかりの事故パーティ会員が下降点を指示できるはずと考えた。精神的にも疲労しており女性でもあったので、いささか躊躇したが、本人からは同行を快諾してもらえた。

仮眠をして早朝5時に7名で出発。2名は指導センターで無線を担当。8時半には堅炭尾根の下降点に着いた。県警ヘリは強風のため人も機材も降ろすことができず、谷川岳警備隊は中芝新道から我々の後を追って登ってきているとのことだった。尾根状をロープ4ピッチ固定して下降していった。10時半に登攀終了点のテラスを発見。ここから懸垂下降でワンピッチ下降すると要救助者に接触できた。思っていたより元気だ。3級程度の岩場だったので、私がフルボディレスキューハーネスで要救助者を背負い登り出したが、70kg近い要救助者は重かった。途中から3分の1引き上げセット2本で引き上げてもらうことになった。

ウィンチ

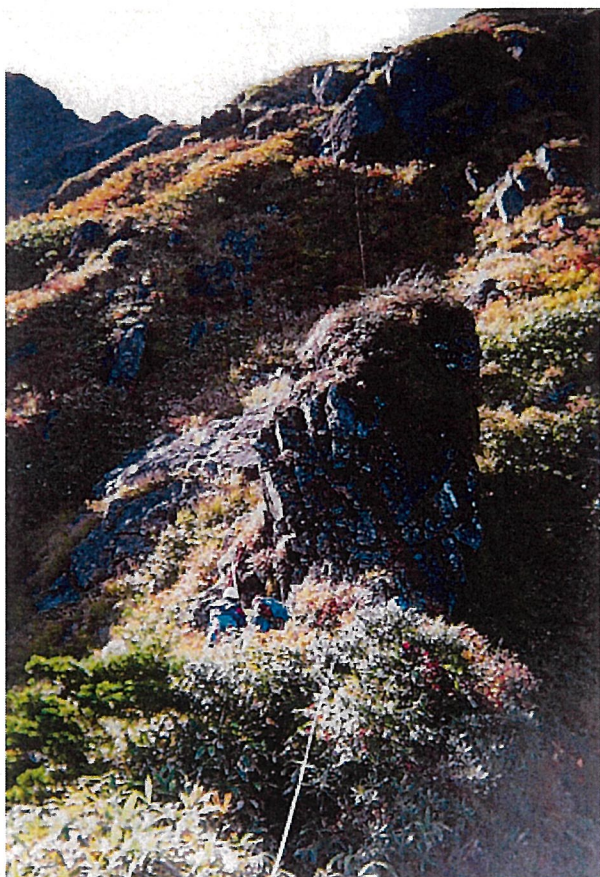
終了点のテラスで、応急手当の経験豊富な隊員がケガの手当てをする。脇腹の出血は止まっていたが、傷口は痛々しい。群馬県警谷川岳警備隊はB隊長が指揮を執り、堅炭尾根から下降してきて、200mワイヤーで引き上げる準備



テラスで応急手当をする。

をしていた。傾斜は緩くなっていたが、登山道はまだ遠い。ウィンチでの引き上げが可能だということで、レスキューハーネスで要救助者を背負ったまま、ワイヤーをセットして引き上げが始まった。傾斜のある場所は荷重が分散され楽だったが、傾斜が無くなると、要救助者の荷重が背中にかかり、顔は笹藪で擦られて苦しい。横についてフォローしてくれたB隊長に「少し休ませて欲しい」と頼んだが、「がんばれ」と言われ、ウィンチの引き上げテンポは早くなった。「この人は鬼か？」と恨めしく思った。これが、この後、何回か一緒に救助活動することになるB隊長との初めての出会いだった。

無事に堅炭尾根まで辿り着くと、ヘリが飛来し要救助者を搬送してくれた。これには大いに助かった。重たい200mワイヤーやウィンチなど、県警の装備もヘリで降ろされた。我々は残っ



ここからワンピッチ登り、200 mワイヤーで稜線まで引き上げられた



稜線にセットしたウィンチ

た装備を担ぎながらの下山となった。無事下りてから撮った写真は、まるで敗残兵のようだったが、皆の顔には充実感が溢れていた。

月夜野病院に運ばれた要救助者は骨盤骨折、右足首骨折、右腕の裂傷で全治三カ月だった。こうして私の救助隊長としての初出動は無事に終了した。

教訓

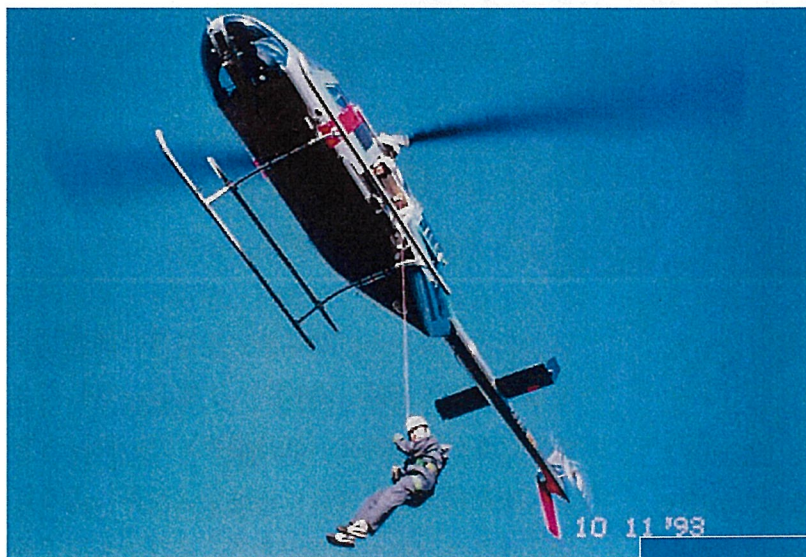
初めての出動は救助実績が豊富な谷川岳警備隊との合同作業になった。しかし、要救助者へのアプローチは別々で、お互いの救助方法を連絡しただけで、一つの救助隊として行動したわけではなかった。天候の関係で私たちが先に要救助者に合流したが、ヘリが予定通り飛べば、私たちに出番はなかっただろう。B隊長は事故を起こした登山者を責めることはなかった。私

はこの事故をきっかけに親しく交流することになった。B隊長が退官して肩の小屋の管理人となるとときには、山岳団体で「新しい門出を祝う岳人の集い」を東京・神楽坂で開催し、司会は私が務めた。地元の公的救助組織と合同で救助活動をする機会は、民間人の安全確保の観点から、現在では稀なことになっている。あの時の合同救助作業が可能だったのは、度量の大きいB隊長ならではのことであった。

出動した救助隊のメンバーは、私も含め全員同じ会の所属だった。このため労山基金への請求は交通費と消耗が激しいロープなど一部の装備代だけだった。もちろん出動した会員は、仲間を無事に生存救出できただけで満足感に浸っていた。ただ、職場に急遽休暇を申請した者も多く、地方連盟所属の救助隊員で地方連盟から出動要請があった場合には、同じ所属団体の

の会員の救助活動でも日当の支給ができるように、この後に改善した。

他に運転手と助手席の隊員以外はできるだけ睡眠をとること、アマチュア無線では中継のための人員を配置することなど、改善点を申し送りし、その後の救助隊活動に役立てていった。



要救助者がヘリでピックアップされる。



重たい200mワイヤーもヘリで回収



遭難現場からの レポート

第12回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

天候に恵まれれば快適な大山の稜線

遭難の教訓

備忘録⑫ 『凍死』

○死亡・行方不明事故

2004年に私が労山の専従職員となってから、毎日のように事故一報を受付けているが、なによりもショックなのは死亡事故だ。2025年には、コロナ後3年続いた7名を上回る、8名の労山会員が山岳遭難事故で亡くなった。これで、私が専従職員として受け取った死亡・行方不明の事故一報は190名となった。暗澹たる思いである。

原因を見てみると圧倒的に転滑落が多く半数

以上を占めている。次に多いのは前々回の夏号で取り上げた病気（29名）となる。そして3番目に多いのが凍死（低体温症）だった。もちろん凍死に至るまでには道迷い、滑落による負傷、雪崩など他の要素がある。それでも悪天候などによる疲労凍死が主たる原因と考えられるものが18名と、1割近くを占めていた。死亡事故全体の分析は他の機会に譲るが、今回は冬号なので凍死について考えてみたい。

○伯耆大山

中国地方の名山で標高は1729m、日本海に

面する独立峰なので、冬期は厳しい天候になることが多い。しかし、天候に恵まれれば日帰りで快適な雪壁と雪稜を登ることができる。私も2007年3月に弥山東稜から剣ヶ峰を経てユートピア小屋までのルートに登っている。ここで2014年3月9日に岡山県連の会員3名が凍死するという事故が発生した。

60代の男性2名、50代の女性1名の3名パーティで夏山登山道を弥山まで登り、剣ヶ峰からユートピア小屋まで縦走する計画だった。事故当日の午前中は天候が安定し、予定より30分ほどの遅れ（12時半）で弥山まで辿り着いた。ここからの縦走路は崩壊が進んで夏は通行禁止となっているが、積雪期は通過できる。ロープを使い安全確保の上で危険地帯を通過したが、14時半頃から視界5mほどの猛吹雪となり、剣ヶ峰と天狗ヶ峰を通過した後1636m付近でビバーク。18時頃に事故者から電話がかかってきたが会話はできなかった。翌3月10日は天候が回復せず、翌々日の11日、朝9時にヘリにより男性1名を発見し吊上げ搬送したが、死亡が確認された。10時半頃、地上から捜索に向かった岡山県勤労者山岳連盟救助隊が残る2名を発見。積雪を1mほど掘りツエルトをかぶっているメンバー2名を発見したが、心肺停止状態だった。天候が安定せず、ヘリにより搬送されたのは、さらに1日が経った12日、病院で死亡が確認された。

大山では2022年2月5日にも兵庫県連の50代男性A氏が凍死した。別山バットレス中央稜を2名で登攀後、稜線で滑落し登り返したものの、下山中に夏山登山道9合目付近で行動不能となりビバーク。パートナーは6合目避難小屋に下山し宿泊後に生還。翌日、警察などの救助隊によりA氏は発見されたが、死亡が確認された。A氏は兵庫県連救助隊員で、前年の福岡県

で開催された全国救助技術交流集会には、私も一緒に参加していた。

大山に限ったことではないが、日本の山は同じルートでも積雪状態と天候によって、難易度が大きく変わってくる。大山は積雪期でも日帰りで登攀でき、最近は天気予報も正確なので、悪天候での行動やビバークする機会が少ない。このため「もう少しぐらい大丈夫だろう」という油断が出てくる。2件とも、ビバーク用のツエルトを持参していたが、吹雪の稜線では役に立たない。小屋に入るか雪洞をつくり、火器があつてツエルトは役に立つ。命を守るためには石橋を叩いても渡らないぐらいの慎重さが必要だ。

○私のヒヤリ

40年ほど前のことだがゴールデンウィークの劔岳でスキーと登攀を計画した。早月尾根から頂上を経由して、長次郎谷を滑り熊の岩で幕営、八ツ峰6峰Aフェースに登攀し、劔沢出合まで滑り劔沢を登り返して雷鳥沢を下る3泊4日の計画だった。3日目、予定通りAフェースの登攀を終えて劔沢まで滑り降りたが、ここから雷雨となった。幕営はあらかじめ劔沢小屋を目指すが開いていなかった。劔山荘が営業していたので、何とか逃げ込むことができたが、3時間程、ストーブの前から動けずに震えていた。完全に低体温症になっていた。重荷で劔沢の登りは寒さを感じなかったが、雷鳴が轟くたびにしゃがんで体力を消耗したこと、飲食無しで登り続けたこと、登攀用に薄着だったのに濡れた衣類を代えなかったことなど原因はいくつも考えられるが、小屋が営業していなければ死んでいただろう。

1997年3月に当時の吉尾弘労山会長と谷川岳一ノ倉沢滝沢リッジを登る機会に恵まれた。



重たいスキーを担ぎ上げた劔岳山頂

吉尾さんは毎年のように滝沢リッジを登っていたが、私は初めてだった。初日にホルンピークの基部でビバークし、二日目はドームの基部からAルンゼへ下降して国境稜線へ抜け、頂上から西黒尾根を下る計画だった。

初日は好天だったが二日目は午後から雪が降り出す天気だった。一ノ倉沢は東を向いているため、比較的猛吹雪で行動できなくなることは少ない。この日もAルンゼで雪崩は気になったが、風は穏やかだった。しかし、国境稜線に出ると視界は無く目も開けられない強風だった。何とかトマの耳から西黒尾根に向かうが、このエリアを熟知している吉尾さんにもルートが分からない。やむなくトマの耳に戻り手探りで避難小屋を目指した。快適に整備されていた肩の小屋に入れたおかげで、事なきを得たが、この時も小屋が開いてなければ、どうなっていたか分からなかった。



谷川岳一ノ倉沢ドーム壁からAルンゼへの下降支点



谷川岳の国境稜線は猛吹雪だった

○教訓

低体温症の怖いところは、頭が冷やされて判断力が鈍くなることだ。着替えや防寒具、テルモスに暖かい飲み物、食べやすい行動食などがザックに入っているとしても、それを使う判断力がなくなると、坂道を転がり落ちるように状況が悪化していく。2012年の5月連休には、白馬岳で医師を含む6人パーティ全員が低体温症で亡くなった。同じ日に穂高連峰の涸沢岳では労山副会長経験者が低体温症で亡くなっている。知識と経験が豊富で十分な装備があったとしても、考える能力が低下して正常な判断ができなくなれば、事故に対処することは難しくなる。頭を含め身体のコアの部分を冷やさないことを常に意識して行動すべきだと考える。

また、凍死については病気死亡（男性が9割を占める）のように、性別による違いは、あまりなかった。ただし、八ヶ岳で救助にあたった

人の報告によると、同じ条件でビバークしていたのに年配の男性が生還し、女性が亡くなった事例があった。このケースでは、女性の下半身が凍りついてしまったとのこと。吹雪の中で女性が小用を足すことは難しく、我慢して失禁すると、下半身が瞬間に凍りついて、寒さに耐えられなくなる。緊急時の対応を考えておきたい。

八甲田山。木道は歩きやすいが、油断してスマホを見ながらは危ない。

遭難現場からの レポート

第13回

日本勤労者山岳連盟 理事長 川嶋高志

遭難の教訓

備忘録⑬ 『転倒』

八甲田山

「あ！」と思ったときは、すでに身体は傾き、倒れることを防ぐことができない状態だった。「何かつかまるものはないか？」目の前に先行者の足があった。溺れる者は藁にもつかむとばかりにとっさに先行者の膝裏あたりに強くあたってバツタリ。平らな土の上だったので、私は腕を少し痛めた程度で済んだが、急に後ろから強く押された先行者は驚いて転倒しかけ、膝を捻ってしまった。

それは7月下旬の早朝、東京を出て新幹線で青森へ、送迎バスに乗り換えて11時過ぎには酸ヶ湯温泉に着いていた。すぐに歩き始めて仙人岱を經由、大岳山頂から毛無岱を過ぎて温泉旅館の屋根が見えてきた16時頃だった。天気も良く、すべて順調にきていた山行で、あとは温泉に浸かり夕食のビールと日本酒が頭に浮かんでいた。

事故はこんな時に起きるものだ。

現場はちょうど旅館の屋根が見える場所で、木の根がまるで罌のように突き出ている。幅の



屋久島、宮之浦岳。登山道はわかりやすく整備されている。

広い平らな道で足元から目線が離れたために、見事に引っかかってしまった。

当たった場所が悪かったのか、先行していたパートナーの足はかなり痛むとのこと。とりあえず宿までは何とか降りたが、温泉に酒どころではない。患部を冷やし安静にして寝るだけ。山行後のお楽しみは泡と消えてしまった。

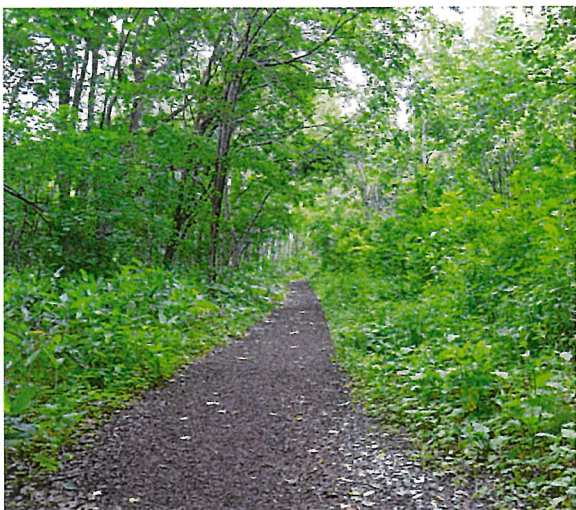
事故一報は最多を大きく更新

2025 年の事故一報は、会員数が 700 名強の減少であるにもかかわらず、なんと 400 名から届いた。2023 年に 366 名という過去最高を記録したが、それを大きく上回った。その中で事故原因が「転倒」によるものが 190 名と圧倒的に多い。

3 月には屋久島の宮之浦岳での事故事例が

2 件あった。宮之浦岳から縄文杉やウィルソン株を見てトロッコ道の木道に出ると平坦な道となり気が緩む。木道は濡れていたり苔が生えていると滑りやすい。ここで転んだ会員は運悪く鉄のレールに肘をぶつけた。これはさぞ痛かったろう。何とか登山口まで歩き救急車で搬送されたが、左肘の脱臼と尺骨を骨折した。また、淀川登山口から 30 分ほどの場所の段差で右足首を捻った会員は、捻挫だと思い湿布しただけで山行を続けたが、下山後に病院で骨折と判明。ギブス固定となった。

このように最近では転倒もしくは転倒してなくても、骨折してしまう事例が多い。転倒事故で死亡した事例はなかったが、事故原因が転倒によるという報告では、114 名が骨折となっており、6 割が骨折していた。骨折は部位と程



札幌市藻岩山への道。このような登山道であれば、かなり安全。



四国、三嶺。左側へ転倒すると転落になる。

度にもよるが、傷病としては重症だといえる。患部を固定して悪化させないようにするため、山中で骨折すると、救助隊による搬出が必要となる場合も少なくない。

山登りは不整地を登ったり降りたりするので、転倒する可能性は高い。他のスポーツと比較して、長時間の行動となる山登りでは、転倒事故をゼロにすることは難しい。しかし、自力下山できないような負傷は避けたい。



長野県天狗山。ハイキングコースでも岩場が出てくる。

転倒事故の男女比

事故一報 400 名の男女別を分析すると、男性が 173 名、女性が 227 名と女性が 54 名も多い。さらに転倒事故（190 名）の男女別をみると男性が 62 名、女性が 128 名と女性の転倒事故は男性の倍以上（67%）発生している。女性は転びやすいのだろうか？ 高齢化により筋力不足になっていることが原因なのだろうか？

転倒事故の結果（傷病名）が骨折になったのは前述したように 114 名だったが、男女別をみると男性 26 名、女性 88 名と女性が 3 倍（77%）となっていた。女性は 50 歳を過ぎて閉経すると骨密度が低くなると言われているが、その影響なのか？

原因は様々に考えられるが、まずはとにかく焦らずにゆっくり登高下降していただきたい。



蓼科山の山頂付近。ここで転倒すると危険。

冒頭の私の例にもあるように、注意力が落ちる下降時に事故が多いので、集中力を切らさず、慌てて降りようとしないことである。

骨折すると山に登れなくなるだけでなく、日常生活に支障が出てくるので、日頃から筋力トレーニング、食生活、認知能力など、今一度見直して、改善してほしい。

難しい課題

数字に表れてはいないが、登山道での転滑落事故は転倒したことが引き金となっている場合もある。また転倒しなくても身体のバランスが崩れたために受傷した（体勢）場合も含めると、実際には事故の半数以上が重心の移動が適切にできなかったための事故だったと言える。では、どうやって対策を考えればいいのか？

トレーニングと栄養の摂取方法、質の良い睡眠時間の確保などの日常生活、不整地での歩行方法、装備（登山靴、ザックなど）の選択、荷物のパッキング方法、休憩と水分や食料の取り方など山行中の基本、これを会・クラブで新人に限らず全会員に適切に教えることが肝要である。日本勤労者山岳連盟ハイキング委員会で編集している「ハイキングABC」などを利用し、記載されていることは最低限の知識として労山会員なら覚えてほしい。

そして全国連盟では、「登山寿命を延ばすための講習会」を各地方連盟や各会・クラブで開催できることを目指しているので、参考にしていきたい。

ココヘリを 推奨する理由。

労山の仲間の皆さま。労山基金に加入していますか？

労山会員からの事故一報は2025年に400名と今までで最も多くなりました。労山基金は自前の救助搜索費をカバーし、入通院の交付もあります。海外での事故でも基本的には国内と同じ条件で交付されます。ただし、他の保険でも同じですが、生存救出の可能性を高めるわけではありません。

生存救出の可能性を高めてくれるのはココヘリです。

ココヘリの発信機を持って自分の居る場所を正確に確実に伝えることで、圧倒的に生存救出の可能性が高くなります。死んでしまうことと生きていることは、まったく違います。

私は20年間、労山の専従職員として仲間の事故一報を受け付けてきました。その中に200名近い死亡・行方不明事故があります。2025年は9名でした。この事故一報は何としてもゼロにしたいと思います。その可能性を高めるために、ココヘリ加入と利用をお勧めします。

日本勤労者山岳連盟
理事長 川嶋 高志



ココヘリって実際何しているの？

搜索事案を
見る ▶▶▶



日本勤労者山岳連盟

日本勤労者山岳連盟
専用ルートからのご入会だと

入会金 通常 ~~3,000円~~

0円

ココヘリのご入会はこちらから
▶▶▶



説明会のご依頼は

右記QRコード、または omine@authjapan.com へ 山岳会名・ご担当者名・ご連絡先を記載してメールにてご依頼ください。

